

うつのみや てついち  
宇都宮 徹壹

(写真家・ノンフィクション作家)

いまはし えいこ  
今橋 映子

(東京大学助教授)

20世紀の終わり、日本の写真家若手世代は自由に国境を越え、世界を切り取っている。彼らにとって「写真」とは何なのか。「撮影」とはどのような行為なのか。そして何が彼らを駆り立てるのか。

この特集を締めくくるにあたり、気鋭の写真家・宇都宮徹壹氏にご登場いただく。「サッカー」をキーワードに欧州を撮り続けている宇都宮氏と今号監修者である今橋映子氏。それぞれの写真への思いを伺った。

# 「サッカー」から生まれる写真文化

今橋——宇都宮さんは最初の著作『幻のサッカー王国』（勁草書房、一九九八年）で解体した旧ユーゴスラビア諸国に行かれて、サッカーチームやそれを支えるサポーターたちをカメラに収め、そして次の『サポーター新世紀』（勁草書房、一九九九年）では、一九九八年のサッカーのワールドカップに乗り込んでいってスタジアムの外の様子やサポーターを取材されました。どちらも非常に興味深く読ませていただいたんですけども、最初の著作の冒頭のところに「とにかく行かなければ」という文章が出てきますよね。非常に印象的な部分なので、その一文につながる、取材に出發するまでの経緯を伺いたいです。

## 東欧に旅立つこと

宇都宮——その説明は少し長くなるんですが（笑）。僕は大学院を出てから、いわゆる企業向けビデオ制作会社で働いていたんです。リクルート活動用の会社紹介ビデオを作っている会社です。でも、はっきり言ってつまらなかつた。それで、もうちょっと別の仕事をしたいなと思って、次に移ったのがテレビ番組の制作プロダクションだったんです。たまたまそこがスポーツ番組をメインにやっているところで、特にサッカーの番組制作に定評のあるところだったんです。ちょっと面白そうかなと思って入りました。

今橋——だいたいいつごろになりますか？

宇都宮——一九九四年から九七年まで、そのプロダクションには在籍しました。でも実際にやっていたことは、海外から送られてくるサッカーの試合の映像から、オン・エア用に時系列でデータを書き出して、いちいち記録する仕事だったんですよ。「何分に誰々がシュート、何分誰々が得点、誰々と誰々が交代」と。サッカーの試合を撮るとか、編集するとかではなく、ずっと画面を見続けて記録して。あのころが一番サッカーを見ていた時代でしたね。（笑）

今橋——面白い作業をするんですね。

宇都宮——そういったデータをもとに、ディレクターがサッカー番組を編集するんです。どの場面を使うか、とか、どこが「おいしい」か、とか。「おいしい画」という言い方を業界ではするんですが。

今橋——いわゆる「決定的瞬間」のことですね。

宇都宮——ええ。それをずっとやってまして、あと資料も作っていました。どういう資料かというと、アナウンサーがその試合をさも実況のように「何分、誰々がシュート！」と言うわけでは

よ。そうすると解説者が「うーん、今は惜しかったですね」とか言うんですが、その解説に使うための資料データを打ち込む作業をやっていました。例えば、「ダボル・シューケル、クロアチア代表、身長何センチ、体重何キロ」とか。

今橋——テレビを見てみると、テロップで簡単に出てきますね。あれですか。

宇都宮——そうです。ですから、選手の顔と名前が一致しなくても、データだけは覚えていてという異常な（笑）事態がずっと続いています。

あの時、スペイン、イングランド、ドイツのリーグを番組でやっていたんですが、あることに気がつきました。特にスペインが多いんですが、東欧出身の選手がリーグの中で、数的にもパフォーマンス的にも目立っていたんです。特に旧ユーゴスラビア諸国から出稼ぎに来ている選手が非常に多くて、しかもプレイがすごくうまいんです。

当時、東欧というのは、僕の中ではまだ共産主義のイメージが非常に強かったんですが、ユーゴスラビアの内戦というものが知識として知っていました。ですから、スペインのラテン的な雰囲気と、東欧の選手たちというのが、なかなかシンクロしなかつたですね。「なぜ彼らはサッカーがうまいんだろうか」「なぜ彼らは祖国から出てきて、スペインとかイングランドとか異国の地でプレイしているんだろうか」「戦火にある祖国をどう思っているのだろうか」とか、いろいろ頭の中で想像しているうちに、彼らに会ってみようか、その場に行ってみようかという気持ちでフツツと湧き上がりました……。

## 三十一歳、写真家宣言

宇都宮——ちょうどそのころ、テレビの仕事にも限界を感じていた時期でしたので、考えがぐらついていたので。つまり、テ



南アフリカ共和国サポーターたち。ワールドカップ フランス'98にて  
撮影 宇都宮徹壹

レビの仕事というのは、休みはない、給料は少ない。生活だけがどどん疲弊していくんですよ。そのころ、三十歳になったぐらいのころで、このまま十年先、二十年先こういう状態が続くのかなあ、と漠然と考えていました。その時頭の中に、荒木さん(荒木経惟)のことがあったんです。あの方が「写真家宣言」をしたのがちょうど三十一歳の時だったんですね。それがずっと頭の片隅にこびりついていました。普通人間は三十になる時にいろいろ考えるんでしょうが、僕は三十一になる直前にいろいろ考えまして、荒木さんのように有名にはなれないかもしれないけれど、やはり三十一歳になったら自分も「写真家宣言」をしなければならぬと思って、東欧に飛び出したんです。

今橋——「天才」宇都宮も三十一歳で「写真家宣言」したんですね。(笑)

宇都宮——天才ではありませんが(笑)。荒木さんは確か一九四一年の生まれなんですよ。だから当時の三十一歳と、僕の世代の三十一歳というのはまったく違って思うんですよ。さらに言うなら、あの方は電通に勤めてらっしゃった時にすでに、新人写真家の登竜門といわれる「太陽賞」を受賞していた。そして、最愛の伴りよ、陽子さんとも結婚されていたわけですよ。つまり、タイトルは持っていた、パートナーもいたところで、ボンと会社を辞めて「写真家宣言」した。自信もあの人にはあったわけです。あの時から「自分は天才だ」と言っていたらしいですから。

僕の三十一歳の時は何もなかったんですよ(笑)。タイトルもない、パートナーもない、自信もない。さらに言うなら、あの時からすでに日本は不景気でした。他の人はどうか知りませんが、自分にとってのいちばんの冒険というのが会社を辞めることでした。会社を辞めてフリーの写真家になること。それに比べたら、バルカン半島へ行くことって、そんなに冒険とは感じなかったですね。

もまた土着の、砂漠の民の出身だったんです。ユーリ・ジョルカエフという選手はアルメニア系です。お父さんもサッカー選手で、昔ワールドカップでフランス代表チームの一員として活躍したことがあるんですよ。

フランスは、以前もサッカーが強かった時代があって、その時活躍していたプラティニ(ミッシェル・プラティニ)選手はイタリア系でした。あと、アフリカ系のティガナ(ジャン・ティガナ)という選手もいました。

今橋——なるほど。でも、フランスがそういう移民で成り立っているということに意識が向いて、これが今のフランスなんだというのを国民がはつきりと実感したのは、私はついこの間の九八年のワールドカップじゃないかという気がするんです。フランスが移民も含めて成り立っている多民族国家だということ、フランス人自身がセルフ・イメージとして受け取ったということですね。フランスの場合、エリートの方が強い中央集権国家なので、移民排斥の動きが政治的にずっとある一方で、文化的には多民族のものを受け容れようとするどん欲さも併せもっている分、事態は複雑です。フランスがワールドカップで優勝したのは九八年が初めてだったんですか。

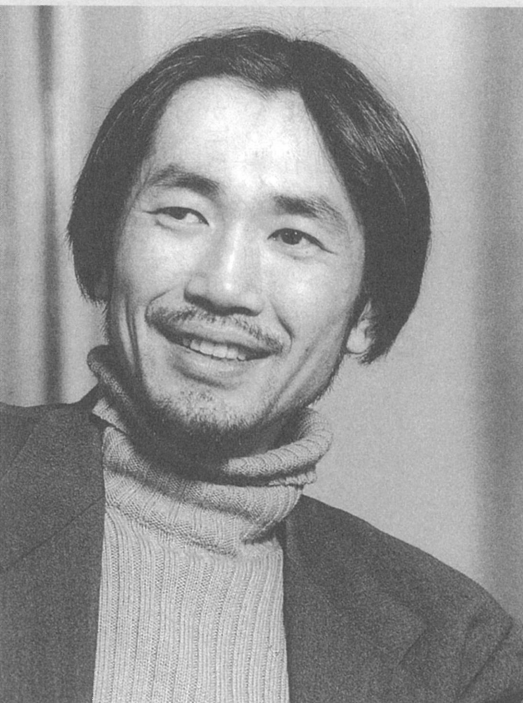
宇都宮——史上初でしたね。フランスチームが優勝した時、移民排斥を訴える極右政党・国民戦線の党首、ル・ペンが、うの音も出なかったといえますからね。決勝戦では、移民で構成されたフランス代表チームを応援したのか、いっそ対戦相手だったブラジルチームを応援したのか、ぜひ聞きたいですね。

今橋——インタビュースればよかったのに(笑)。その意味でも、宇都宮さんが、サッカーと民族問題を結びつけて写真を撮っていたら、それは非常に興味深いと思います。サッカーとナシヨナリズムそのものを結びつけて、さらに書かれているように、選手だけじゃなくて、サポーターがそこに加わって作るサッカー・民族・文化というダイナミズムをもとらえている。その

宇都宮 徹彦

1966年生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了。フットボール(サッカー)をフィルターにして欧州の民族問題、宗教問題を切り取る。処女作『幻のサッカー王国——スタジアムから見た解体国家ユーゴスラビア——』(勁草書房)では、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビアなど、旧ユーゴスラビア諸国のサッカーを取材しながら、この解体国家の現状を臨場感あふれる文体で伝えた。二作目『サポーター新世紀——ナシヨナリズムと帰属意識——』(勁草書房)では「ワールドカップ フランス'98」に臨み、これまであまり語られることなかった各国サポーターたちをレンズに収め取材した。

撮影 高木厚子



今橋——なるほど、実感ですか。

宇都宮——今思い返すと、会社を辞めたら後は突っ走らなければならぬ、きつとその思いだけしかなかったと思いますね。

今橋——その突っ走らなければならぬ、というエネルギーが東欧に行かせたということですね。

国家のセルフイメージの投影

宇都宮——九八年のワールドカップでフランスが優勝した時、フランス代表チームのメンバーに移民の選手が多かったというのをご存じですか。

今橋——ええ、知識としてですが。

宇都宮——中心選手のジダン(ジネディーヌ・ジダン)がアルジェリア系で、しかも父親がベルベル人という、アルジェリアの中で

点でも、「ナシヨナリズム」の脱構築という今日的な学問の世界の動向ともびったり重なっていると、私は感心したんです。

見るサッカー、語るサッカー

今橋——宇都宮さんご自身は、サッカーをどう考えているんですか。

宇都宮——僕自身、下手でしたが小学生の時からずっとサッカーをやってきていて興味があつた。それで、単にスポーツとしてではなく文化としてサッカーをとらえると、非常に世界が分かりやすく見えますし、自分にフィットしているような気がしたんです。

今橋——そういう視点でサッカーをとらえるというのは今まで意外となかったんじゃないですか。

宇都宮——なかつたですね。スポーツに対するとらえ方というのは、日本ではあくまでも報道が主流でしたし。

でも、ヨーロッパのサッカースタジアムに行くと「見るサッカー」というのがありますし、「語るサッカー」というのも同時にあるんです。それはサッカーだけでなく、これをスポーツ全般に置き換えても構いませんが。向こうではスタジアムの外で普通のおばちゃんがサッカーを雄弁に語るんです。選手のこととか、試合内容のこととか。そういった土壌がまさに文化だと思えますね。

今橋——今までも自分もサッカーをやってきましたんですが、はつきり言ってベンチ・ウォーマーだった時期の方が長かった。そのくせ練習だけきつかったり、先輩・後輩の上下関係が厳しかったりとかで、あれだったら今の子どもたちも嫌になりますよ。そこが日本のスポーツの悲劇だと思いますね。

今橋——あるいは非常にマニアックな人たちが自分たちの言葉で語っているという状態。だから私みたいにサッカーが分からな

いと本当に入っていない。  
**宇都宮**——よく向こうに行つて、「言葉どうしたんですか。」つて聞かれるんですが、僕はセルビア語なんて十単語ぐらいしか知らないんですよ。

**今橋**——今もですか。

**宇都宮**——ええ。ちょっと勉強しようとも思つたんですが、才能がないみたいで。でも、言葉が通じなくても成り立つコミュニティションというのがあるんです。これは身をもって感じました。東欧に行つて、「サッカーを見に来た、俺はこのチームの試合を見に来たんだ」と言うと、そこから話が弾んで、食事をご馳走してもらつたり、一緒に酒を飲んだり、コミュニケーションでできるんです。

**今橋**——面白いですね。

**宇都宮**——不思議ですね。言葉じゃない部分で、サッカーというキーワードだけで盛り上がりつて笑い合えるんです。

だいたい、ヨーロッパではサッカーの試合というのが、土曜日か日曜日に行なわれるんです。それでホームアンドアウェイ方式で行なわれるんで、確実に二週間に一回はホームゲームがあるんです。つまり、二週間に一回サッカーチームがある町にお祭りがくるような雰囲気ですね。だから、例えば日曜に教会のミサに行つた後、その足でサッカースタジアムに行くようなことが、大衆の文化として成立してしまうんです。

**今橋**——日本の場合はスポーツはテレビで見るという人がすごく多いですよ。ヨーロッパではスタジアムに行つて、実際に観戦する人が多いということですか。

**宇都宮**——イタリアでは今でも国内リーグ(セリエA)はテレビの地上波で生中継をやつていないはずですよ。ラジオではやっていますし、ダイジェストで編集された番組というものもあります。ただ、基本的にサッカーはテレビで見るとはなくて、スタジアムへ行くものだ、という感覚が根強くありますね。

と思いました。ワールドカップというのは、それだけで済むような話じゃないんですよ。

フレームの外に見えてくるもの

**今橋**——宇都宮さんの本の中ですごく気に入っている写真が一枚あるんです。『幻のサッカー王国』の中に出てくるこの不思議な男(下段写真)。

**宇都宮**——「誇り高き男」ですね。この人はちょうど、ベオグラードのサッカーチームや当時盛り上がりつていた反政府デモを取材していた時に撮つたんです。彼はそのデモの参加者の一人だったんですが、文中にもありますが、彼には片足がなかったんです。ずっと、撮らしてくれて意思表示していたんですが、拒否されつづけて。ベオグラードを去る日になって、やっと「撮つていいよ」ということになりました。

もちろん言葉は通じなかつたんですが、僕の目の前にすつと立ってくれたんです。最初は身体全体を撮ろうと思つたんですよ、足のないところも見えるように。でも、やはり違うかな、と思つて。なんでこの人を撮りたかつたのかというと、今でもよく分からないけれど、目を中心にしてオーラが出ていて、それを撮りたかつたか言えないですね。あと、勲章のようにつけられたバッジに引かれたとか。

**今橋**——ほかの写真と対比してこの写真はどこか現実から異次元に行くような感じがしたんです。もしそこにブラッサイがいたら、この「誇り高き男」を多分撮つたと思います。ブラッサイの写真とどこか共通するなあとと思ながら、写真を見ていました。あと気づいたことなんですが、宇都宮さんは都市の風景を撮影する時に、どこか象徴的なものを撮るんですね。人じゃなく、別のちよつとしたものを撮られている。

**宇都宮**——要するに都市のキャプションをつけながらモノを撮る

スタジアムで完結しないスポーツ

**今橋**——実際に宇都宮さんご自身も一九九八年、ワールドカップのスタジアムに乗り込んでいくわけですよ。

**宇都宮**——実は、あの時スタジアムに日本人カメラマンで入れたのつて、全体で十人もいなかったと聞いてます。僕みたいなフリーランスには入場パスなんて回つてこない。

**今橋**——そんなに少ないとは、驚きですね。

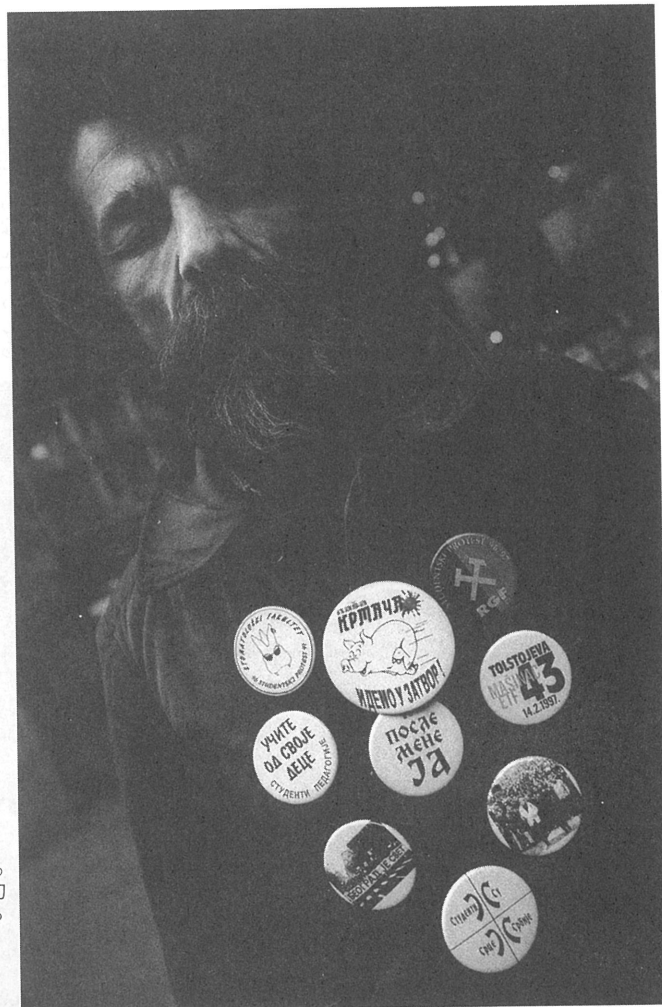
**宇都宮**——世界中から取材陣が来ますからね。日本人で取材許可が下りていたのは、大新聞や専門誌の人たちだけでした。僕などはチケットすら全然手に入らなかった。ちゃんとスタジアムで観戦できた試合は二試合だけでした。いずれもつまらない試合だったんですけども。(笑)

**今橋**——最悪の試合だったと書かれていましたね。(笑)

**宇都宮**——それで考え方を覚えて、やっぱり普通のカメラマンが撮らないものを撮るのが自分の仕事だと改めて思つたんです。

そこで、スタジアムの中よりスタジアムの外を、試合よりもサポーターたち、サッカーに熱狂する人々の様子を取材しようと思つたんです。やつているうちにその方が断然楽しくて、すごく面白がつて取材してました。ワールドカップに参加した三十二カ国のサポーターにアンケート取材をして、それぞれのポートレートを撮つてたんです。あちこち試合と共に移動しながら、その町で繰り広げられる光景を追っていました。

その時感じたんですが、スポーツはスタジアムの中では完結してないんですよ。ある有名なスポーツ誌の編集者が「われわれはスポーツというものはスタジアムの中で完結すると考えている。サッカーで言えば九十分の中で完結する。それ以外のことはあえて語る必要はない」というようなことを言つてたんです。この人とはちよつと一緒に仕事はできないだろうな、



ベオグラードで出会った「誇り高き男」。『幻のサッカー王国』から撮影 宇都宮徹老

レームの外側が見えてくることであるじゃないですか。一つだけのキャプションがあるだけでいい。年号と都市の名前だけでも。例えばもし、「一九八九 パリ」ってキャプションがあったらどうですか？ いろんなことを考えますよね。

**今橋**——なるほどね。私はクーデルカというチェコ出身の写真家が最近気になるんですが、その理由の一つが、彼の写真が構図的に非常に上手なこと。チェコにおける環境問題に焦点をあてた写真を見たんですが、細長い写真で構図がバチッと決まっている。例のクーデルカ流の黒と白の濃いトーンではつきり焼き付けている。それを見ながら、フォト・ジャーナリズムの写真において、構図とテーマというのは、矛盾することも、共存することもあるんだなと思いました。

**宇都宮**——ところで、写真だけにできて、ビデオ、映画、テレビにできないことって何だと思いませんか。

**今橋**——うーん、ちょっと分からないですね。

**宇都宮**——写真にはタテ位置があるんですよ。縦の構図が。テレビとかビデオって、横に寝ちゃうんですよ。タテ位置ができて、たぶん、唯一の映像メディアなんじゃないですか。

タテ位置で撮る時って、ある種の余裕がある時とか、どうしてもタテでなきゃいけないんだという気持ちがある時なんです。普通は、瞬間瞬間で被写体を追っかけている時は自然とヨコ位置になると思うんですよ。それだけ、タテ位置って無理な体勢での撮影なんですよ。ね。「誇り高き男」は本の中では演出的な意図であえてヨコ位置にしましたが、実際はタテ位置で撮ってます。サポーターのポートレートもタテ位置で撮ってますね。

二〇〇二年、異文化との遭遇

**宇都宮**——ワールドカップの試合を取材しながら常々思ったことですが、海外からのサポーターたちが日本の地方都市に乗り込

んできたらどうなるだろう、ということ。例えば大分二〇〇二年の開催地にいきなりナイジェリア人の大群が押し寄せたり、新潟(同)にいきなりブラジル人が大挙して来て、交通渋滞が起こったりしたらどうするんだろうか、と。

**今橋**——生活習慣がまったく違う人が来るわけでしょう。日本はこんなに遠くても、サポーターたちは来ますか？

**宇都宮**——絶対、好きな人は来ますよ。そのために四年間お金をためてる人だっていると思いますよ。中には開催国での滞在費とかを考えないで来ちゃう人も結構いますし。それこそ、野宿でもなんでもしちゃう人もいますよ。

そこは日本人とまったく違うんですよ、日本の常識なんて通じないですね。

**今橋**——それこそが異文化遭遇なんですよ。マニユアル対応なんて絶対できないし、かといって、警察がすぐに出て行って対応するという問題でもない。

本当に深刻な問題ですよ。ね。「サポーター新世紀」の最初の方の写真、ワールドカップのサポーターたちを写した十二枚の写真がありますけど、あれだけで一つのフォト・ス



ワールドカップ フランス'98  
フランス勝利の瞬間  
撮影 宇都宮徹志

トリーになっていると思うんです。

このフォト・ストーリーを次のワールドカップまでに日本人が考えないといけないわけです。こういう人たちが来て、それが一時通過者というよりも、もっと深い形で私たちの日常に入り込んでくる。こういう人たちと私たちがどうやって接するか、これはお題目ではなくて、実際にどうするかという現実問題ですよ。

**宇都宮**——一つには日本のスポーツ界のツケが回ってくるんだと思いますよ。これまで、スポーツをスタジアムの中でしか考えてこなかったことに対するツケです。

**今橋**——二〇〇二年というのは、日本でもいろいろなことが見えてくるはずですね。ワールドカップの変質とか、サッカーと観客の関係とか。観客とサッカーファン以外の一般の方との関係とかも。

**宇都宮**——次回のワールドカップは二〇〇二年の六月一日に始まり、同じ月の三十日に終わるんです。ぴったり一カ月なんですね。僕は二〇〇二年の七月一日から、本当の日本のスポーツの歴史は始まると思うんです。お祭りは盛り上がるんですよ。問題はその後です。こんなに大きいスタジアムを作りました。ポランテアはいろんな経験をしました。みんながサッカーを好きになって盛り上がりました。では、そのことを、以降どう生かすか。むしろそっちの方が僕は重要だと思えますね。

長野オリンピックに関して言えば、長野の人たちはまだ税金をオリンピックのために払っているそうです。でもまだ、誰も長野オリンピックの総括をしていないんです。少なくとも僕は聞いたことはないです。

**今橋**——そういうジャーナリズムが本当は必要だと。

**宇都宮**——スポーツを競技から切り取る人、選手から切り取る人、いろいろいいと思うんです。経済から切り取る人ももちろん必要ですし、医学として切り取る人もいてほしいと思います。

そして文化から切り取る人も。オリンピックも、もちろんワールドカップも、もっと多面的に切り取られるべきですね。

「すきま市場」のパイオニア

**今橋**——私はフランスにおけるフォト・ジャーナリストの黎明期の研究を、今やっているんですが、黎明期の写真家たちにとっては、非常に自己定義が難しいんですよ。彼らの場合、自分はアーティストだと最後は思っているところがありますから。アンリ・カルティエ・ブレッソンなどもそうですが、彼らの場合

合展覧会もするし、写真集も出す。ジャーナリストなんだけれど、アーティストとしての仕事も精力的にするわけです。もともと彼らがシュルレアリスムの深い影響下にあったことにも大きく関係するんですが……。とはいえ彼らは自分たちの映像を「超現実」のものとは考えていません。例えばブラッサイは最も日常的な事物や現実から出発して「超現実」に至ることこそが、自分の目標だと言っています。

そういったことを考えながら、現在のフォト・ジャーナリズムを考えた場合、ひとつはインターネット、テレビというものが即流れてゆくようなジャーナリズム、報道、そしてそこで必要とされる写真なりポートがあつて、それは日々消費されていきますから、それなりの有効性がある。一方で、宇都宮さんのように、きちつと長期に取材して、時間をかけて分析して本にして、長い時間をかけて売っていく場合もある。ところが一方で、例えば東欧に関するものでしたら、それについての学問的な分析書があるわけですよ。そうすると宇都宮さんのスタイルは、リアルタイムで消費されるものとアカデミズムで流通されるものとの間に存在するような形になってしまい、非常に困難なのではないかと思ひます。

ただ、現場にいらっしやると、その困難を上回る良さという



今橋映子氏  
撮影 高木厚子

のをご自分でも実感されるわけですね。

**宇都宮**——まず自分では、ジャーナリストという自覚は正直言っ  
てあまりありません。ただ、フィクションの作家ではないので  
嘘はつかない、それだけです。書くにあたっては、やはり読者  
に分かりやすい構成は考えます。時系列をちよつと変えたりと  
いうのは、差し障りがない程度にはやっています。要はまず買  
って読んでもらわないと、絶版になってしまうから。やらせと  
かは論外ですが、手にとってもらう、ページを開いてもらう、  
立ち読みしてもらい、買ってもらうための種のある種のサービスピ  
神は絶対必要だと思います。

サービスというのは語弊があるかもしれませんが、でも僕に  
はサービスという言葉に対して卑しい意味は、まったくないと  
思うんですね。表現者というのは、僕の考えではある種のサー  
ビスが必要だと思います。そのサービスというのは単純に、た  
だ問題意識を共有するだけでもいいですし、美を共有するだけ  
でもいい。興味の扉を開く、読者の関心の窓を開くということ  
が、自分にとつてのサービスピだと思っています。

**今橋**——だからこそ、さっきおっしゃっていた、スタジオアムの中  
だけで完結し、その中で理解されるようなスポーツジャー  
ナリズムとは一味違ったものができるんですね。

**宇都宮**——さっき間あひだという言葉をお使いになって「なるほど」と思  
ったんですが。僕自身、ただの宙ぶらりんな存在だと思ってい  
ました。ニッチという言葉がありますよね、ビジネスで使う、  
「すきま市場」という意味ですが。僕はその辺を狙っています。  
ニッチともいうけれど、できればパイオニアになれればいいな  
とも思っているんですが。

まず、人がやらないこと、人が見過ごしていること、人が軽  
視していることの中に実は面白いものがたくさんあって、それ  
らを開拓できればと思っています。

サポーターの存在だって、それまでは色物でしかなかったわ

けですよ。テレビのサッカー番組で、途中の映像と映像の間を  
埋めるものでしかなかった。でも、僕はいつも、どうしてそん  
なに冷たくあしらわれるんだろう、とずっと思っていたんです。  
一つにはマスコミの示す指針といいますか、「これがメジャー  
なんだよ」とか、「これがはやるんだよ」とかいうものにみんな  
が振り回されすぎているという現状があると思うんです。

**今橋**——情報は古びるといふ強迫観念が心の中にあるんですよね。  
だから日々何か新しいものに接していないといけないですよ。  
持ちになってしまふ。でも、例えば、ワールドカップにしても、  
九八年フランス大会、二〇〇二年の日韓共同開催がある。でも  
それで終わりかという、絶対終わりではなくて、そこにつな  
がって継続していく問題があるわけですよ。だからそういうと  
ころをpushして取材してゆくのを誰がするかということ、なか  
ない。

**宇都宮**——ジャーナリズムという分野一つとってもそうですし、  
芸術、文学者、評論家、批評家何でもいいんですけど、縦割り  
じゃないですか。僕もずっと横断していいと思うんですよ。  
横断してからこそ分かることがありますし、それぞれ別の分野  
に興味を持っていた人が、クロスオーバーしていくことってあ  
るじゃないですか。

例えばサッカーが好きな人たちには、写真のこともっと知  
ってほしいんですよ。それだけで世界が広がるじゃないですか。  
そこでやはり文化というものが語られるんですよ。そしてそ  
の後、ユーゴのアートに興味を持って、例えばアブラモビッチ  
(セルビア人アーティスト。米国在住)の作品にも触れたりするき  
っかけになれば、と思っています。逆に写真やアートに興味がある  
人には、もっとサッカーに関心を持ってもらいたい。国民  
性や民族性がアートや音楽、文学なんかに現われるように、サ  
ッカーの世界でも顕在化するんですよ。その意味で、やっぱりサ  
ッカーは文化なんだ、と思います。

●編集後記

▽「目の前に広がる世界を枠で切り取って、ある瞬間、五百分の一秒という瞬きの瞬間を伝えること——」（港千尋氏のインタビューから）。カメラのファインダーを覗きシャッターを押すことで、写真の中の世界は固まってしまうが、フレームの外の、焦点を合わすこともままならない現実をも汲み取ることができれば、と思いつながら八八号の制作作業を続けていました。

▽監修していただいた今橋映子先生の印象。進取の気性、好奇心の解放、無尽蔵のアイデア。その行動力と熱意には

次号予告

特集・観光という異文化接触（仮題）

観光（ツーリズム）をフィルターにして見た異文化理解、国際交流——。

観光は今日、さまざまな形態でわれわれの前に存在します。そしてそれは日々進化しています。アーバン・ツーリズム、エコ・ツーリズム、スポーツ・ツーリズム。細分化、複雑化が進むにつれて、われわれが観光に求めるもの、社会的な観光の意義も変容していきます。

特集では（国際観光）を中心に据え、さまざまな角度から「観光」をとらえます。「観光」はどのような国際交流を生み出すのか、どのような条件で成立していったのか、そして今後、どんな産業となつてゆくのか。文化的、歴史的、社会的文脈から「観光」を再考すると共に、「観光」と国際交流の関係を浮き彫りにします。

何度も励まされました。先生と話すうちに、フランス、東欧、写真の（見方）が何度も変わりました。

▽大石芳野さんはご自身の写真展を控えてお忙しい中、対談にご出席いただきました。大石さんの口から発せられる言葉、胸にこたえました。宇都宮徹彦さんからは興味深い話を聞くことができ、サッカー文化、サポーター文化の醍醐味を実感、二〇〇二年のワールドカップ・日韓共同開催のゆくえが気になるところです。ご自身は、この号が出るころには、ユーロ二〇〇〇（サッカー欧州選手権）の取材で欧州にいらつしやるはずでした。

▽今号の表紙は佐内正史さんの写真集「わからない」からの一枚。「決定的瞬間」がここにもあります。（M・K）

国際交流基金賛助会のご案内

国際交流基金では、広く民間からのご協力を得て事業の充実をはかるため、毎年一定額のご寄付をお願いする賛助会の制度を設けております。会員の方々にはレセプションへのご招待、本誌を含む定期刊行物のご送付等の特典をご用意しておりますので、この機会にご入会いただき、国際交流基金の事業拡充をご支援くださいますようお願い申し上げます。なお、国際交流基金は税法上の「公益の増進に著しく寄与する法人」に指定されておりますので、ご寄付に関しては免税措置を受けられます。

■年会費：個人一口 2万円 団体一口 10万円  
※但し、5口以上お申し込みいただいた場合には特別賛助会員とさせていただきます。

お問い合わせ：国際交流基金 経理部資金課  
TEL 03-5562-3519 FAX 03-5562-3496

国際交流基金ホームページ アドレスのご案内

アクセスをお待ちしております。  
<http://www.jpfi.go.jp/>

本誌編集委員

飯田経夫  
石井米雄  
粕谷一希  
片倉もとこ  
加藤秀俊

国際交流 第88号

二〇〇〇年七月一日発行  
定価 八〇〇円（本体七六二円）

送料 三二〇円

編集・発行 国際交流基金

東京都港区赤坂一ノ二ノ三三  
アーク森ビル二〇・二二階  
郵便番号 一〇七―六〇二二  
電話 〇三（五五六二）三五三三二

発売元 第一法規出版株式会社

本誌購読ご希望の方へ

\*本誌の定期購読をご希望の方は、最寄りの書店又は第一法規出版株式会社にお申し込みください。  
\*第一法規出版株式会社の連絡先は次のとおりです。  
東京都港区南青山二ノ一ノ一七  
電話 〇三（三四〇四）二二五一（代表）

◎二〇〇〇国際交流基金  
（本誌記事の無断転載・放送を禁じます。）

# ● 国 ● 際 ● 交 ● 流 ● 2000 88

## 特集 写真 世界を映す装置

監修 今橋映子

- 巻頭対談 フレームの外側の現実  
大石芳野×今橋映子
- 対談 「サッカー」から生まれる写真、文化  
宇都宮徹彦×今橋映子
- インタビュー 現場への「参加」に向けて  
港 千尋

内藤久雄／林 文浩／妹尾浩也／深川雅文／宮本陽一郎  
金子隆一／平木 収／柏木 博／今城力夫／西村清和

